富士川の恵み 繁栄下支え

明治以来 由比、蒲原潤す特産物

サクラエビ異変

江戸の浮世絵から読み取れる富士川と駿河湾の結びつき。明治のサクラエビ漁の発達で一層色濃くなる
＝12月下旬、静岡市清水区の市東海道広重美術館

浮世絵に駿河湾水運 描写

クラエビ加工の老舗の一つ。地元だけでなく、県外からのリピーターも多い。

サクラエビの産卵、組成につながる水質とされる富士川と産卵場である駿河湾の結びつきは、江戸時代の名所絵にも見られる。

江戸時代末期の浮世絵師歌川広重の「東海道五拾三次之内 由井薩埵嶺（ゆいさったみね）」の画中の駿河湾には、富士川を下り清水港を経て江戸に向かうとおぼしき帆船が浮かぶ。静岡市東海道広重美術館の山口拓海学芸員(33)は「当時から盛んだった水運が描かれたとも読み取れる」と解説する。

「富士川の恵みで商売を続けてきた」。1921（大正10）年から続く水産物加工販売店「水谷商店」（静岡市清水区蒲原）の4代目店主の水谷久美子さんは、駿河湾産サクラエビなどを販売してきた家業の歩みをこう語る。同店は蒲原のサ

現在の薩埵峠から見た駿河湾。明治以来続くサクラエビ漁だが、18年秋漁の出漁はなかった
＝12月下旬、静岡市清水区

1894（明治27）年、富士川河口の沖合の駿河湾で、由比のアジの夜引き船が偶然、大量のサクラエビを引き上げた。折しも由比、蒲原両町（当時）では、鉄道の開通により宿場町が衰退し、製塩業も低迷しつつあった。豊漁の評判はたちまち広がり、両町の漁船はこぞってサクラエビ漁に転換。河口沖の天恵は、地元を潤す特産物となった。

明治から昭和にかけて活躍した生物学者でサクラエビ研究の先駆者の中沢毅一（1883～1940年）は河口沖という限られた場所で水揚げされる理由を追究した。

当時の論文「駿河湾産櫻蝦（サクラエビ）の研究」の中では「富士川の水が特殊の濁りをなす」と指摘。「富士川尻には有機物質が多い」とした上で「河に流されて来た有機物は悉（ことごと）く海に入つて海底に沈殿する、この故に櫻蝦の餌料が他地方よりも豊富となり、蝦を繁殖せしむる」と説明している。漁を続けていくため、環境保護の大切さも訴え続けた。

中沢らの学問的な後押しもあり、高まった漁業関係者の環境意識。戦後に入り浮上した富士川火力発電所計画や田子の浦港のヘドロ公害問題では、一丸となりサクラエビの生活場を守り抜いた。それゆえ明治以来、サクラエビは〝駿河湾の宝石〟であり続けてきた。

ただ、かつて年間数千トンあった水揚げ量は、平成終盤に千トン前後と低迷。環境の異変を感じているという水谷さん。「今こそ、陸と海両方の環境を地域全体で見直す時期だと思う」と語る。

（「サクラエビ異変」取材班）

静岡新聞

© 静岡新聞社 無断複製転載を禁じます